平成２２年度
愛知県保育研究発表会
（愛知県保育研究集会）

と　き　平成２３年２月１２日(土)

ところ　名古屋市公会堂

主　催　愛　知　県
　　名　古　屋　市
　　愛知県社会福祉協議会
　　愛知県保育士会

平成２２年度 愛知県保育研究発表会　開催要綱
（愛知県保育研究集会）

１　趣　　旨　　少子化が進む一方で待機児童は増加しており、認定こども園の施行などにより子育ての環境が変化する中、保育所保育指針が施行され、地域の子育て支援の拠点としての保育所の機能強化が求められています。

このときにあたり、県内保育関係者が一堂に会し、保育実践に基づく研究発表により保育者の資質向上と、児童福祉の一層の推進に努めようとするものです。

２　主　　催　　愛知県　名古屋市　愛知県社会福祉協議会　愛知県保育士会

３　後　　援　　名古屋市社会福祉協議会　愛知県児童福祉施設給食会

４　日　　時　　平成２３年２月１２日(土)

５　会　　場　　名古屋市公会堂　（名古屋市昭和区鶴舞１－１－３　TEL052-731-7191）

６　対　　象　　県内保育事業関係者　約1,500名

７　日　　程

13:00～13:20	受　付
13:20～13:30	開会・挨拶
13:30～13:40	珠川賞授与（７団体：尾張２　三河１　名古屋４）
13:40～13:45	休憩
13:45～14:45	研究発表 ①名古屋市（公立） ②犬山市 ③豊橋市
14:45～14:50	休憩
14:50～15:30	研究発表 ④名古屋市（民間） ⑤半田市
15:30～16:00	講評 名古屋短期大学　名誉教授　小西由利子氏
16:00～16:10	閉会

思いを表しつながり合うための子どもの育ちをみつめて

― 保育士の資質を高めるために ―

豊橋市主任保育士研究会
発表者　大木　直枝
中島　美奈子

Ⅰ　はじめに

生活の多様化から、ここ数年子ども達を取り巻く環境の変化は著しい。家庭や地域での生活体験の乏しさ、人との関わりの希薄さ、生活リズムの乱れも、子どもの育ちに大きく影響を及ぼしている。また、保護者も子育ての孤立化などから不安や悩みが増大し、社会的支援を必要とする家庭が増え、保育園に向けられるニーズが高まってきている。

保育園において保育士は、「保育所保育指針」の改定による多様なニーズに答えるべく、子どもに向き合い「子どもの育ち」を見守る中で、日々葛藤を繰り返している。 統合保育・延長保育等保育が多様化していく中で、ともすれば「気になる子」に対して、保育士の視線が向いてしまう傾向にあり、子ども一人一人が出している小さなサインに応答し、つながっていくことの難しさを感じている保育士も少なくない。

私達主任保育士は、今回、直接子どもと関わる保育士達が子どもからの小さなサインに気づき、子ども達がつながり合う楽しさが味わえる保育の実践を目指した。そのために主任保育士として必要な手立てを考えていく中で、保育士が自分の保育を振り返る手助けとなり、保育士としての質の向上を図れるように、この研究に取り組むことにした。

Ⅱ　研究のねらい

1　保育士が、子どものサインに気づき、思いを表しつながり合うための子どもの育ちを見つめることで保育を深められるよう、主任保育士としての援助方法を探る。

2　保育士自身の気づき、自分の保育を振り返るための自己評価のあり方を、様々な方向から検討し明らかにする。

Ⅲ　研究方法

1　研究期間　　平成18年度～平成21年度

2　研究対象　　豊橋市内55の保育園　3～5歳児および保育士

3　研究の進め方　①主任保育士会で作成したアンケートを実施・集計する。

②保育士の意識調査から課題を捉える。

③子どもの人と関わる力の育ちについて保育実践から探る。

④事例を読みとり、分析・考察を行う。

⑤考察結果をもとに、保育の自己評価のあり方を提示する。

Ⅳ 研究内容

1 保育士の意識調査

◆目的　保育士が課題としていることを〈子ども〉〈保育士〉〈保護者〉に分けて各園から出し合い、共通理解を図る。その結果を考察しながら、保育士一人一人が「専門性」を高めていくために、主任保育士として必要な援助方法を探る。

◆対象　豊橋市内の保育園に勤務する保育士

◆時期　平成18年11月～19年2月

◆方法　主任保育士が各園の保育士に質問用紙を配布し、記述式で回答を得た。

◆結果

＜子どもに関すること＞

○気になる子どもが増えている
・表情が乏しい子　・怪我をしやすい子　・いじめっ子　・いじめられっ子　・生活リズムの乱れている子
・食生活の乱れている子　・親子関係の希薄な子　・情緒不安定な子（異常に愛情を求めてくる子）
・トラブルの多い子　・健常児と障害児との間にいるグレーゾーンの子　・乱暴な子　・体力がない子
・感情のコントロールができない子　・保育士が困らない子、良い子（目立たない子）・自己中心的な子
・落ち着きのない子（話の聞けない子）　・物がないと遊べない子　・経験不足の子（遊び・生活）
・集中力がない子　・挨拶ができない子

○統合保育について
・健常児と障害児が一緒に過ごすことの難しさ

○延長保育について
・延長保育と子どもの心の変化
・延長保育の中の姿とクラスでの姿を比較していく中で見られる、子どもの育ちの変化

＜保育士に関すること＞

○職員間の連携
・職員間の意思の疎通　・保護者との信頼関係　・外国籍の保護者への対応

○多様化する保育ニーズ
・これからの保育士に求められること
・粘り強い子に育てるための遊び（伝承遊び、集団遊び）
・保育士の言葉がけ（確かな子どもの育ちをみつめて）
・モデルとしての保育士（愛情ある環境を整える、身近な保育士の関わり）

＜保護者に関すること＞

○生活リズムの乱れ
・朝食を作らない　・寝る時間が遅い（親の都合で子どもを振り回している）

○子どもとの関わり方がわからない親
・親自身が子育てを楽しいと思えない　・子どもの遊びに関われない
・情緒が不安定　・親としての意識の欠如　・命の大切さに対する意識の低さ

○親子の関係、親同士の関係の希薄さ
・自己中心的な親　・孤立している親

○保護者との連携の難しさ
・気になる子どもの増加、親への伝え方　・保育士と親との信頼関係　・世代間における意識の違い
・地域とのつながり

調査結果から、保育士は実際の保育の中で多方面にわたる課題を抱えており、この中から一つの課題だけを研究対象とすることは困難であると判明した。さらに課題を検討していく中、保育士が支援を必要とする子ども達に手を取られ、日々の保育を行っている場合が多いことも明らかになった。

このような現状を認識していった際、「支援を必要とする子」とは逆に「支援を必要としない」子ども達のうちで『友達あるいは保育士に、自分の思いをなかなか出せずに毎日を過ごしてしまう子』の存在が浮かび上がってきた。

今回の研究では、このような子どもが『自分の思いを表し、つながり合う楽しさが味わえるための保育のあり方』を探っていくことにした。

2 主任保育士会での検討内容

各園から対象児の事例を持ち寄る。

◆対象児 『友達あるいは保育士に自分の思いをなかなか表せずに、毎日を過ごしてしまう子』

- ○ 思いはあるが、自己主張を強くしない子
- ○ 思いはあるが、友達の中で流されがちな子
- ○ 思いはあるが、集団に影響を与えない子

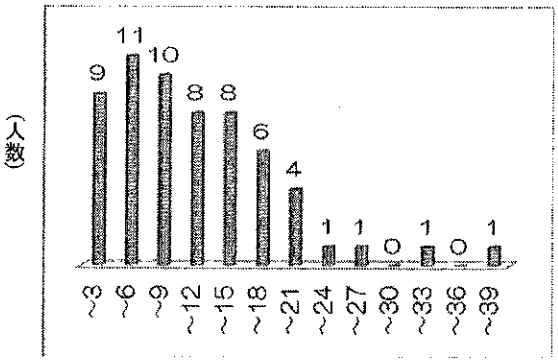
◆事例項目

- ○ 対象児の様子
- ○ 特徴的な保育場面
- ○ 保育士の視点と関わり
- ○ 対象児に関する他の保育士からの情報
- ○ 主任保育士のコメント

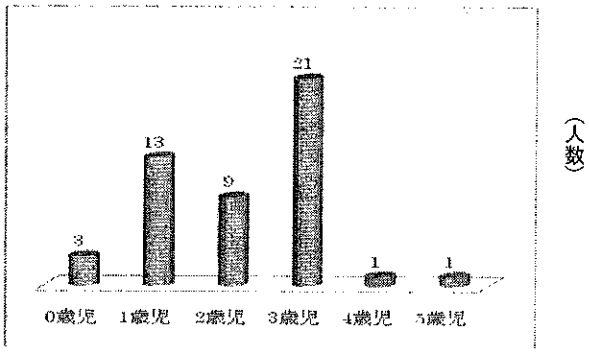
【事例から分析】

- ○ 思いを表し、つながり合おうとする子どもの内面には発達段階がある。
- ○ 子どもの変化には、保育士の気づきや細やかな関わりが大きく影響している
  （複数の保育士との連携が必要になる。）
- ○ 対象児は、自分が意欲的に取り組む活動では、思いを表しやすい。
- ○ 様々な場面での事例をとったが、土曜日保育や長時間保育の時には、どの子も思いを活発に表し、対象となる子どもがほとんどみられなかった。
- ○ 対象児の背景を考えると、家庭の要因がうかがわれることから家庭支援の必要性がある。
- ○ 事例をとった保育士の経験年数は、10年未満が多く、主任保育士からの援助が必要であると思われる。

【アンケートに回答した保育士の経験年数…3年ごとに表示】



【対象児の入園時期】



3 保育方法の視点

以下を共通認識とし、「思いを表し、つながり合う楽しさを味わえる子どもの育ちを支える援助のあり方」を〔保育指針〕・〔精神保健〕を使った文献から考察する。

【子どもの変化】
- 信頼関係や自己肯定感から生まれる情緒の安定
- 様々な経験や環境の中で抱く心情(感動)・意欲
- わき上がった心情(感動)・意欲を保育士や友達に伝えようとする気持ち
- つながり合うための「ことば」(話す力・聞く力)の発達
- 相手の思いに気づき、受けとめようとする心の成長

【変化の要素】

A 保育の視点

つながりたいと思っている子どもの思い(小さなサイン)に細やかに気づける保育士の感性と技術、保育士の連携

B 保育の形態から探る

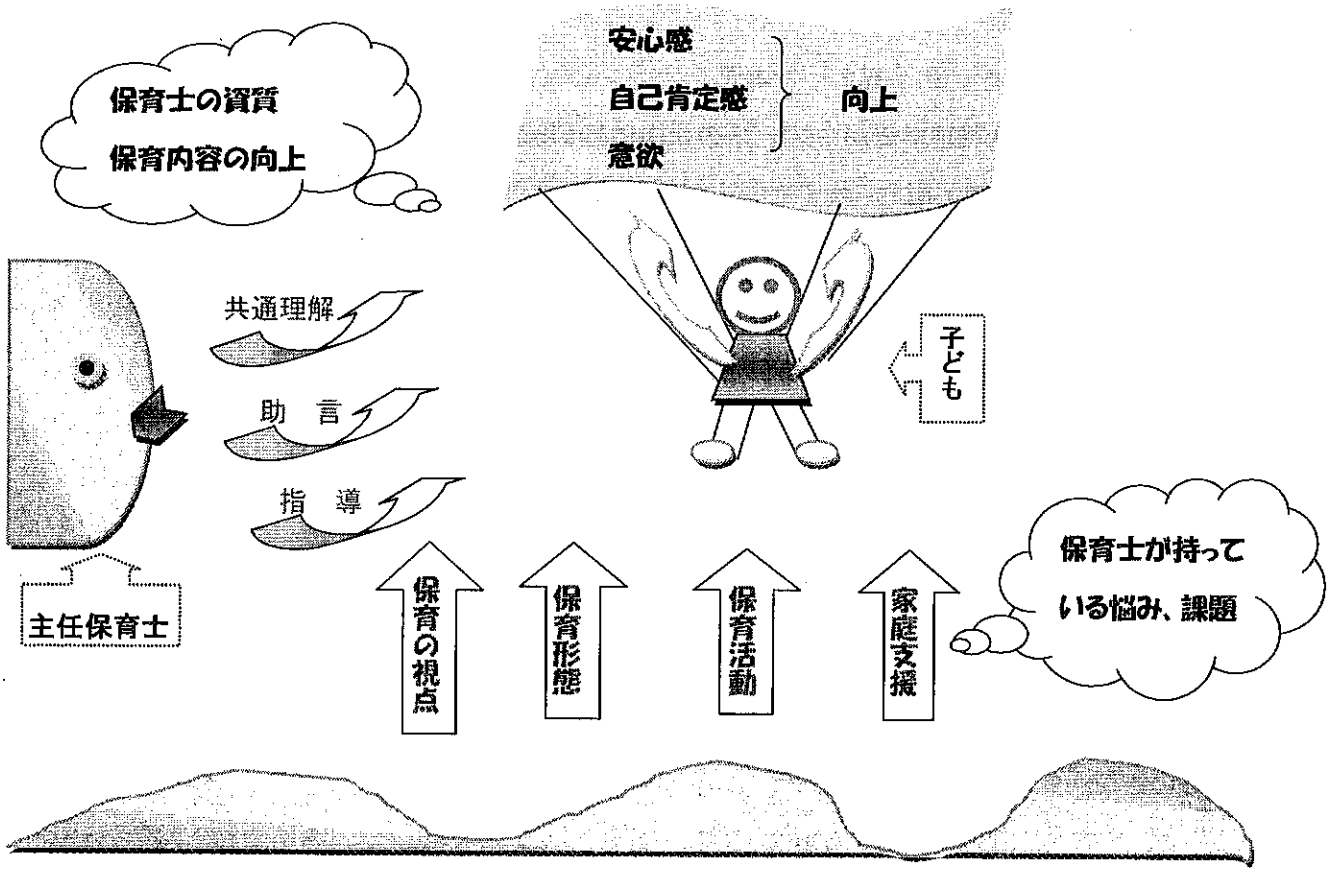
子どもが思いを表し、つながり合う楽しさの味わえる形態

C 保育活動のあり方

子どもがすすんで経験し、そこでの感動(心情・意欲)がまわりとのつながりを生むような保育活動

D 家庭支援を通して

保護者自身が子育てに喜びを持ち、子どもの情緒の安定を図り、子ども自身が自己肯定感が持てるような支援のあり方



4　事例検討 ― 保育の形態から探る ―

子ども達が「自分」というものを、どのような時に周囲の大人（保育士）に表わし、遊びや生活に意欲的に取り組んでいるのか、また、取り組んでいけているのかを考察した時に、「環境」が大きく影響しているのではないかという見解に至った。園における「環境」には、人的・物的・場の環境とあるがその中で、「人的環境」に注目し、それを保育形態から探っていくことにした。そこで多くの事例が見られた「長時間保育」という形態をとり上げ、事例検討をする。その際、以下のような手順を踏んだ。

（1）　長時間保育場面において事例をとる。

（2）　長時間保育の場面において、複数の保育士から関わり方と良い面の事例をとる。

（3）　長時間保育の事例から見られる良い面をまとめる。

（4）　市内の55か園の保育士を対象に、アンケート調査を行う。

①　長時間保育場面においての事例と考察

◎　4歳児女児を対象として、事例をとる。

（ア） 本児の背景

（家族構成） 父　母　兄2人　本児

（養育態度） 入園前は母がネグレクトの傾向にあったが、今は特に問題なし。 時々登園が遅く、母から離れられず泣くことがある。

（イ） クラスでの様子

親や仲の良い友達の前では、笑顔で話す姿を見かける。しかし、保育士に対しては、要求等を自分から伝えてくることはほとんど見られず、気づいてもらうのを待ち、保育士を目で追っていることが多い。

（ウ） 長時間保育での様子

時間が遅くなり、少人数になると自分から友達や保育士に話かけてくる場面が多く見られる。また、年下の子の世話を保育士に頼まれたり、自ら積極的に行ったりする姿も見られる。

◎ 考察

子どもの人数が少なくなり、好きな玩具で自由に遊べることで落ち着いて過ごせている。昨年の担任保育士など複数の保育士と関わることで、自分の思いを出しやすく、いつもと違う姿を出すことができ、安心して過ごせる場になっているのではないかと思われる。日常の保育場面において、自分の思いをうまく出せない子にとっても、保育環境（保育士・保育形態）が変わることで、「なぜ」自分の思いを出しやすくなるのかを複数の保育士のとった事例から考察する。そこから関わりのポイントや長時間保育のよいところを探していくことにする。

② （2）についての事例と考察

	A保育士	B保育士	C保育士	D保育士
保育士の関わり方	気持ちを受けとめて、相手に伝えたり、また、相手の気持ちも理解しやすいように、優しく話しかけたりしていく。また、甘えたい気持ちを受けとめ、膝にいれるなどして、スキンシップを図りながら話すようにする。	年下の子に優しく接している姿を認め、一緒に関わりながら、思いやりの気持ちを大切にしていく。 話かけに、じっくりと耳を傾け丁寧に対応していき、話したい欲求を満たしていく。	近くに来た時は、ゆったりとした中で話に耳を傾け、共感していくようにする。 友達と関わっている様子を見守っていく。	欲求を受けとめ、会話を楽しめるようにするとともに、じっくり関わることで、情緒が安定し落ち着いて過ごせるようスキンシップを図ることも大切にしている。 優しい面を認めたり褒めたりして自信につなげ、思いやりの心をのばしていけるような言葉がけをしている。
保育環境	・グループの構成　異年齢 ・保育士の形態　当番保育士と専任保育士 ・保育の内容　いくつかの遊びの中から、子ども達が好きな遊びを選んで遊ぶ。			
長時間保育のメリット	《保育士》 ・子どもの甘えたい気持ちを受けとめ、じっくり関わることができる。 ・子どもの数が減ることで、ゆったりとした気持ちで一人一人の子どもとの関わりが持ちやすくなる。 《子ども》 ・異年齢の子がいるので、年下の子と関わる場面が増え、思いやりの気持ちが育つ。 ・ゆったりと過ごすことができるので、一つの遊びに集中し、友達との関わりも十分持ちやすい。 ・保育士とゆったりと関われることで気持ちが安定し、落ち着いて過ごすことができる。			

◎ 考察

複数の保育士が長時間保育での子どもへの関わりについての事例をとった。そのことにより通常の保育の中では保育士が意図して持つようにしていかなければならない子どもとの関わりが自然とできていることを読みとれた。

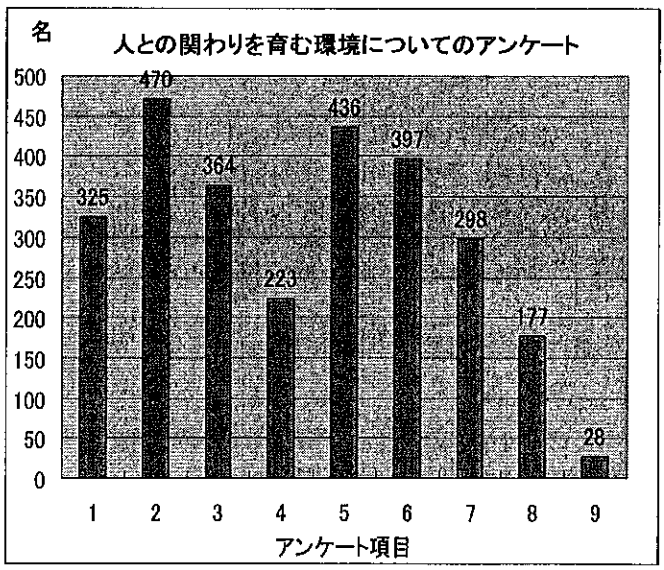
このほかの事例においても同様な様子が見られた。そこから、長時間保育における良い面を抽出し、まとめる。

③ (3)についてのまとめ

子どもから見た良い面
○ 人数が少なくなることで、集中して好きな遊びができ、落ち着いて過ごせる。 ○ 年下の子がいることで、年下の子と関わる場面が増え、思いやりの気持ちが育つ。 ○ 少人数であるため、クラス別保育では遊ばない友達とも遊べ、遊びの幅が広がる。 ○ 思う存分に玩具を使い、遊びこむことができる。 ○ 部屋が変わることによって、目先が変わり、楽しんで遊べる。 ○ 課題や規制が少ないので、自己発揮が十分にできる。 ○ 担任以外の保育士と関わりを持つことができる。 ○ 他のクラスの子とも仲良くなることができる。
保育士から見た良い面
○ じっくりと関わっていくことで、情緒が安定しやすい。 ○ 人数にゆとりがあるので、甘えに対しても十分に応じられる。 ○ 保育士がゆったりと関わることで、子どもの思いに気づきやすい。

上記の結果をもとに、人との環境を育む環境についてアンケート項目をまとめ、市内55か園の保育士を対象に日常の保育に何が大切と考えるかアンケート調査を行った。

④ (4)のアンケート調査の結果と考察



(回答総数 601名)

アンケート項目
1 自分の好きな遊びが十分楽しめる。
2 異年齢児と関わりを持つことで、同年齢同士とは違った姿が出せる。
3 少人数であるため、自分の思いを出しやすい。
4 気の合う友達と好きな遊びが楽しめる。
5 保育士とゆったりと関わることができる。
6 担任以外の保育士との関わりの場がある。
7 好きな事をして過ごせる時間と空間があるので、自己発揮がしやすい。
8 保育士に様々な要求をできるかぎり満たしてもらう。
9 その他

◎ 考察

前項のアンケートの結果を受けて、保育士自身も「ゆったりとした環境を作ること」の大切さを感じている様子が見られる。しかし、通常の保育においては、「人数が多いから」、「行事があるから」、「気になる子に…」という、理由をつけて向き合うことをあえてしていなかった。物的環境は各園においての制限はあるものの、人的環境については、保育士が意識していくことで、変化が出てくるのではないかと思われる。

このことから、アンケート項目の5「保育士とゆったり関わることができる」に着目し、保育指針における内容【人間関係】(イ)の②『保育士との安定した関係の中で、共に過ごすことへの喜びを味わう。』を中心に捉え、アンケート結果の内容を現場の保育士に返す。そして、保育内容を意識して保育に携わっていくことができるよう指導計画・普段の活動・家庭支援の中から実践例をとりあげ、主任保育士としてどのような指導が必要になるのか検証してみることにした。以下実践例を紹介する。

5 (1) 事例検討 ― 遊び ―

【目 的】 日常保育の場面から自己表出していない子に保育士が気がついているか、保育士はそのような子にどのような援助をしているか探るために事例をとる。

① 3歳児の事例

いろいろな遊びの場面での対象児の自己表出の様子、保育士の援助のあり方を探るため事例をとり持ち寄り検討する。

N. S	性別 男 3歳児		
本児の背景	[家族構成] 父、母、姉(小1)、祖父、祖母 [養育態度] 母親は本児のことを細かく気にする。何でも自分でやりなさい、きちんとしなさいという感じ。本児が甘えようとしても「早くいっておいで」「なに!?」など少し突き放した言い方をする時もある。		
子どもの姿	・みんなが楽しんでいても、すっとその場を抜け出し、隅に行って様子を見たり違う遊びを始めたりする。		
保育場面	・おもちゃを取られたり何かいやなことがあったりしても、保育士に言わず自分だけで我慢してしまうことが多い。泣く姿もあまり見られない。 ・保育士が声をかけてもあまり話そうとするわけでもなく一人椅子に座り、好きな粘土遊びを淡々とした感じでやっていることもある。		
内面の推測	・みんなと遊ぶことが嫌なわけではなく、遊びに飽きて別のことをやりだした。 ・遊びに興味を持てない。 ・思いをはっきり出さないが、保育士に傍にいて自分を見てもらいたい。	保育士の援助	・自分で何でもしてしまい声をかけることが少なくなりがちなため、本児の姿を十分認め声かけすることで「見ていてくれる」という安心感を本児が持てるようにする。 ・保育士や気の合う子と遊ぶ中で、徐々に友達の輪を広げていけるようにする。まずは本児との関わりを多くする。
保育士間の情報収集	・自分で遊びから抜けていく、参加しないというよりは、仲の良い子が「やらない」と言うと本児も"やらない"という感じに見える。		
主任保育士として	・遊びに入らなかったり抜けたりしても"自分を見てほしい"という気持ちは感じられる。保育士に時々本児の方を見て声をかけ、またその場でなくても1日のうち十分関われる時間を作れるように工夫してはどうかと伝える。		
本児の様子	・抱っこしたりスキンシップを図ったりすることで意欲的に話す姿が見られた。保育士が関わりを少し意識することで、次の遊びを探したり、友達の中に入ったりする姿も見られた。		

② 4歳児の事例

仲間意識が徐々に芽生える時期なので他児との関わりを含め事例を検討する。

O・Y　性別　男　4歳児			
子どもの姿	・友達の中にあまり入っていこうとせず、本児1人で土を触っていたり遊具に乗っていたりする。保育士の問いかけには「うん」とうなずいたりする。 ・製作では、隣の子の真似をして少し描いてみる。絵の具で塗ることを楽しんでいた。 ・保育士の体をよく触る。		
保育場面	・遊戯室にて2チームに分かれてジャンピングボールを使ってのリレーごっこ。赤とオレンジのマットの好きな方に分かれる。自分の好きな方に動く。リレーのルールを聞き遊び始めた。ピョンピョン跳んで行き、カラーコーンを回って友達と交代する。本児の順番がきてボールをまたいで進んだ。同じチームの子の「頑張れ！」という声援を聞きながら行い、次の子と交代する。マットのところで待機して応援する。立てひざをし同じチームの子に「頑張れ」とボソッと言う感じで声を出している姿が見られた。リレーの結果は本児のチームが勝ち、友達と一緒に喜んだ。		
内面の推測	・リレーの自分の順番はいつ回ってくるのか、早くこないかなという気持ち。 ・周りの子がリレーの応援に盛り上がっているのを見て、自分のチームが勝って欲しいという気持ちになっている。 ・友達や自分の頑張りから勝ち喜んだ。 ・自分にかまって欲しい、見て欲しいという欲求の表れだと思った。	保育士の援助	・本児の気持ちを受け入れ、認められたという満足感が得られるようにしている。 ・子どもの様子を見ながら、リレーを盛り上げ本児の順番になると他児と一緒に声をかけていく。 ・友達の活躍に対して一人一人に声かけしたり、認めあったりした。本児にも声をかける。
保育士間の情報収集	・陶芸のとき、手形の横に好きな絵を描いて良いのだが描けない。棒を持ったまま保育士が手を添えて点々と描く。 ・降園時、母親の言うことを聞かず走って門から出ようとする。 ・保育士の体を触りに来る。甘えたいのかも…。 ・当番になり食器など持ちに来るとき、話さないが嬉しそうである。 ・部屋で自由に遊んでいるとき、病院に入院して「点滴したんだよ」「おうちに大きな蜘蛛がいた」という話を何度もする。 自分から話すときははっきりと話す。		
主任保育士として	・本児は運動遊びは好きな様子。いろいろとり入れて他の子とも関わりを持てるよう声をかけていく。一人一人の頑張りを認めながら、本児に意識的に声をかけている様子。少しオーバーな感じで「すごいね！」と認めてあげてはどうか？本児が「がんばれ」とボソッと言ったことを見逃さず「〇〇ちゃんが応援したから勝ったね」など後で1対1で声かけすると保育士がちゃんと見ていることが伝わるのでは？ ・うれしそうにやっている得意なことは何かを知り、それをきっかけに自信を持つようにしていったらどうか。		
保育士間の援助・関わり	・運動面が得意な様である。鉄棒のところで隣にいた子が前回りをするのを見て同じようにする。「すごい」「かっこいい」といつもよりオーバーに褒める。少し照れた表情をしながらもう一度やってみせてくれた。「先生見て」という言葉はないが保育士の方をチラッとみて確認してからやる。“ちゃんとみてよ”というように感じた。 ・本児に関わるときオーバーに認める言葉かけをする。		
本児の様子	・運動会の時にやったリズム遊びを生き生きとやっている。運動会用に編集した曲ではなく長めのをかけてしまったが、保育士のアドリブの振り付けにも真似て踊っていた。抱っこしてぐるぐる回る遊びをしていた。以前だと離れたところで見ていたが、やって欲しいと集まってくる子ども達の中に自分から入ってきた。		

＜①、②の考察＞

3，4歳児の事例をとる様式については「主任保育士として」の助言の項目を先にしたが「担任の思い」があり、その上での「主任保育士と担任との話し合いが大事であること」の必要性を感じ、「保育士の気づき」を先に持っていく様式に変更することを確認した。保育士の援助、主任保育士としてのアドバイスについては“見守る”“褒める”“1対1の関わり”の大切さが分かる。しかし、子どもが周りの子を意識する4歳後半になると、友達との関わりが大きくなると思われ保育士の援助も“友達と関われるように”が中心となってくる。

※　同様の形式で考察を踏まえ5歳児まで事例をとった。対象が5歳児となると『年齢相応の発達をしている』園児であれば集団の中で育つことも多くなってくる。そのため事例のとり方の様式を換え、その子ひとりだけを事例にとるのではなく友達との関わりを基に事例をとることにした。

③ 5歳児の事例

・子どもの姿を基に、保育士の様子・主任保育士としてのアドバイスを記録する。

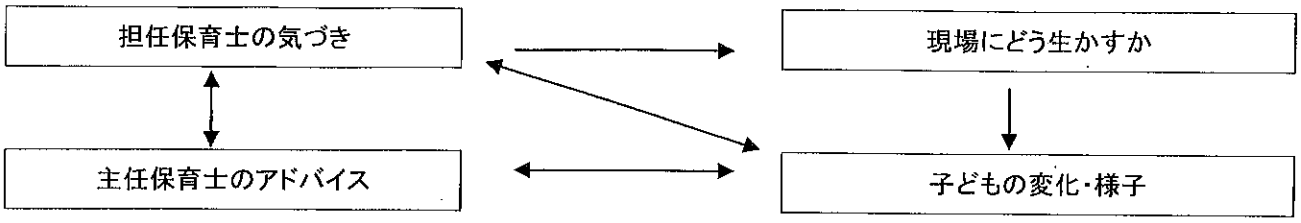
・やりとりの流れを ⟶ にて明記する。

子どもの様子	担任保育士の様子	主任保育士からのアドバイス
・ドッジボール、鬼ごっこなどクラスでまとまって遊ぶことが多くなる。ドッジボールの中に入らない子もいる。 ・劇遊び「十二支のお話」動物まねっこをしたことで表現が伸び伸びしてきている。	・ルールのある遊びがクラスで盛り上がっているので、楽しんでいきたい。 ドッジボールに入らない子達には、声かけはするが、無理強いはしない。	・担任が中に入って一緒に喜んだり、悔しがったりして楽しんでいることは良いと思う。遊びに入らない子には、声をかけ、時にはその子の遊びに参加したらどうか？ ・子ども達の動きが大きくなってきたね。
・自分の役に自信を持ち、照れ隠しでふざけてやったりすることもあったが、「もう恥ずかしくないもん」と言い、いろいろな先生に「見とってよ」と見てもらうことに喜びを感じている様子。	・子どもの意見を聞いて、自分にはもうでき上がっていると思っていたのでアドバイスを貰っても考えられなかった。まねっこ大会をして、子ども達にどの動きが良いかという遊びをしたら、子どもも納得し、動きがのびのびしてきたように思う。 「台詞も自信を持って言えるといいな」 ・劇遊びが終わった後、「良かったよ」と一人一人抱きしめながら、声をかけた ・嬉しそうに「そうですか」 ・「ありがとうございます。私も子どもがいきいきとやっている姿がうれしかったです」	・一人一人の頑張りを認めて、オーバーに褒めてみたら。 ・子ども達が自信をもってやるようになったね。 ・一人一人のやる気を認めて、卒園までにもっと自信をつけてあげたいね。今日の先生の褒め方良かったよ。
・発表会のリハーサル その子なりの頑張りを見せる。一人でも台詞を大きな声で言っている。	・「〇〇君が大きな声で言ったのが嬉しい」「先週、風邪で休んでいてどうかなと思ったけど張り切ってやれてよかった。」	・一人一人の頑張っているところを保護者に見てもらえるといいね。子ども達の伸び伸びした所を大事にしていきたいね。
・発表会では緊張しながらも、各自が自信をもってやっている姿があった。 ・発表会後、「ドッジボール」「はじめの一歩」など自分達で準備して遊び始める。運動遊びは好きなので、積極的に仲間に入っている。遊びの中で大きな声が出て、伸び伸びしている姿も見られる。中に入らない子もいる。	・クラスみんなで作り上げてきた劇で子ども達も対象児自身も「達成感」があると思う。 ・気にしてはいるのだが、どうも自分が遊びを仕切りたいようでドッジボールではそれができず、入りたがらないようです。 ・製作面ですごいアイディアを出すことがあるので、そういった面でみんなに知らせてみます	・発表会でクラスが一つになってやり遂げたという満足感や、みんなでやろうとする気持ちにつなげていくといいですね。 ・「ルールのある遊びに入らず、一人で遊んでいる子がいるけど…」 ・発表会での劇遊びでは、お互いの表現の仕方など「〇〇君すごい」など友達の良いところを認め合っていたので、その子の良い所を先生がみんなに気づかせてみたら？

＜遊びに関する考察＞

遊びの展開を基に「具体的な言葉のやりとり」の記録をとることで、主任保育士が担任保育士の思いに共感しながら、適切なアドバイスをし、担任保育士がそのアドバイスをどのように生かすかによって、子どもが思いを出しやすい環境が作られると思われる。

以上のことを図で示すと次のようになる。



（2） 事例検討 ― 絵本を通して見えてくるもの ―

【目 的】 絵本を通して子どもが感情を表出する場面を事例として捉え、自分の気持ちを上手く表現できない子について絵本を媒体として思いを表せるようにする。

【留意点】 絵本はその子の思いを出しやすいような活動ではないだろうか。感情表出のできない子の絵本の読み聞かせについての事例をとり、主任保育士としてどのようなアドバイスができるのか、考えていった。

【環境設定】

① 隊形

・ 見やすいように座り方を工夫する（読み手を中心に扇型に座ると良い）。

・ 読み手の後ろになるべく物がない場所を選ぶ。後ろが明るい時などはカーテンをひく。

・ 場所を知らせる（敷物・箱積み木・ビニールテープ・椅子・パーテーションなどを使い仕切る）。

利点・・・集中可能な空間を作ることができる。 目で見て分かりやすい。

② 集団の数

・ 年齢や時期によっても違う。

1対1 → 5～6人の小グループ → 大きなグループ（絵本の絵が見える位の人数）

③ 絵本の置き方

・ 表紙の絵が見えるように置いておく。

・ 読みかけの状態で、興味を持てそうなページを開いておくのも一つの方法である。

・ 子ども達の目に入りやすい場所に置く。

・ 月刊絵本を自分のロッカーに入れておき、いつでも見られるようにする。

④ 人的環境

・ 本をただ置いておくだけでなく、保育士の働きかけが必要である。

⑤ 内容

・ 生活にそったもの。

・ 子どもの興味のあるもの。

・ 繰り返しのある難しくないもの。

絵本の読み聞かせの記録　『きみはほんとうにステキだね』　作・絵　宮西 達也

記 録			5歳児　8人
	保:「ティラノサウルス君はどんな気持ちだったかなあ」「泣いとったね。どう思った？」	子どもの姿	○M児に「一緒に絵本読もうか？」と声をかける。M児は自分のために読んでくれるのが嬉しく、言葉はないが頷き笑顔を見せた。そんなM児の周りにいた子が寄ってきたり誘ったりして8人の輪ができた。
子:「… …」	保:「可愛そうだったね」		
子:「悲しかった。違う恐竜が…」			
ティラノサウルス以外の恐竜に興味のある様子、絵本を指しながら			○絵本の登場人物を自分に置き換えて考えるのは難しいことだが、友達に意地悪をしたら一人ぼっちになってしまう、うそをつくのは良くない、友達を大切にする等、色々なことを絵本を通して学び思いやりの気持ちが持てるよう友達との関係を築いてほしい。
子:「この人がこの人を噛んだ」	保:「何もしないのに、意地悪だったね」	保育士の思い	
	保:「Mちゃんはどう思った？」		○前回M児は絵本の感想を表現してくれたので今回は少しでも言葉で表現してくれることを願って読み聞かせをする。
M:同じように絵本を指しながら、「これがこれを噛んで可哀想だった」	保:「何で噛んだのかね？悪い人だったね。何もしないのに意地悪だったね。いかんね、そういう意地悪は…」	保育士の気付き	○次の展開やストーリーが分かっているので、ティラノサウルスが嘘をつく時は「嘘ついちゃった」と言うような表情をしたり、スティラコサウルスが追い詰められる場面では、先を理解した上で少し笑ったり、夜のシーンは悲しい顔をしていた。
子ども達は保育士を見つめる。			○M児は1回目、2回目に比べ、途中落ち着きのない様子で少し内容に飽きた感じであったが、この読み聞かせで保育士と近い距離にいることに喜びを感じているように見えた。M児がだんだん近付いてきて自然に保育士に触れてきたことが嬉しかった。M児の安心感が伝わってきた。
	保:「みんなはさ、みんながティラノサウルスだったら、どんな気持ちになる？」		
首を傾ける子ども達	保:「Mちゃんがティラノサウルスだったらどう思うかな？」	考察	○喧嘩やトラブルが生じた時、相手の気持ちを互いに伝え合い「もし、自分だったら…」と考えさせるようにしている。初めのうちは「嫌だ、嫌だ」の反応だったが次第に一言、二言、何が嫌なのか、どのように嫌なのか考え、もし自分がされたらどう思うのかを考えられるようになってきている。今後は更にトラブルが生じる前に、難しいことだがちょっと考えてみて、少しずつでも、できるように働きかけていきたい。
M:小声で…「嫌だ」	保:「何で嫌？」		
Y:「食べられると思う」			
M:真似して「食べられると思う」	保:大事なお友達が意地悪されてさ、どう思うかな？」		
子:「泣いちゃう…」	保:「ちょっと泣いちゃうね。友達ケガされたら泣いちゃうね」		
子:「この人たちと友達は関係ないから…」	保育士、子どもも笑う	**主任保育士からのアドバイス**	
M:「関係ある」			
子:「はい、おしまい」		保育士	○保育士間の連携を大切に、様々な環境設定を工夫する。
この後、関係ある、ないで暫く言い合う。M児面白くて笑っている			○改まった場面で思いを言葉にして表すのは緊張してしまうが、日常の会話や台詞など決まった言葉であれば、言えるので、自信を持たせると良い。
子:「うそつくのは駄目だよ」			
	保:「あーそうか。うそつくのは駄目だよね。でも後で胸がズキンズキン痛みましたって言ってたよね。うそついて悪かったのかな…」		○絵本の読み聞かせをきっかけとして、笑顔を引き出すことができた。色々な活動・遊びを通して、安心できる環境の下で、一人一人の心を大切に保育をしていく。
うなずく子ども達。保育士に近寄ってくる子ども達、Mちゃんは保育士の膝に手を置いたり触れたりしながら嬉しそうな表情を見せた。	保:「またこれいっぱいあるから読んであげるね」		

＜絵本に関する考察＞

保育士とのつながりから子ども同士のつながりに広げていき、相手と共感する大切さと感情表出としての言葉を育むにはどうしたら良いのか、場面、環境設定を変えて事例をとった。そこから『自分の気持ちがなかなか表せない子どもは、少人数の時や、自分の落ち着ける場所、自分の好きな友達、好きな絵本などの時には自分から何らかのサインを出しているのではないか』ということが明らかになった。また、気持ちを表す際に、言葉を通してだけではなく、様々な表現の仕方が用いられていることが見えてきた。

(3) 事例検討 —家庭支援の側面から —

【目的】 「子どもが集団の中で、自分の思いを表し、つながり合う楽しさが味わえるようにする」ためには、保育園での姿だけではなく、子どもの背景にある家庭にも目を向け、どのような姿を表出しているのかを知ることが必要である。子どもを理解するためにはどのような支援が望ましいのか、主任保育士の立場から考えて家庭支援の方法を探っていく。

① 保護者との具体的な会話記録を通して、支援のあり方を探る。

(事例)5歳児男児を対象として事例をとる(母親の不安が子どもに伝わっている事例より一部抜粋)。

《プール遊びの様子を伝えたときの会話》　保—保育士　母—母親

保「Y君、顔を水につけるとき、涙ぐんでたこともありましたけど、今日は自分から水につけてましたよ」
母「そうですか。 みんなは、どれくらい泳げてますか? 心配…」
保「大丈夫ですよ、お母さん。気になるかもしれないけど、お母さんが不安そうにしていると、Y君にも伝わるからね。
みんなはみんな、Y君はY君だよ。顔を水につけれたことをいっぱいほめてあげてください」
母「そうですね…」
保「『できるようになった?』『みんなは?』 の言葉は余計不安になるからね」
母「わかりました」
【考察】母親の不安や心配が Y に伝わり、情緒面で悪循環になっているので、子どもの様子を知らせ、母親が安心できるように丁寧に伝えていくことで、徐々に安心していくのではないかと思われる。

主任保育士より

保育士が母親に安心してもらいたいという気持ちで以前の様子を伝えながら、今、できるようになったことを知らせていったと思うが、〈以前は泣いていたのか〉とかえって保護者の不安を募らせたのではないかとも思われる。また、「できる、できない」の結果より、一生懸命に頑張っている様子(経過)を伝えることが大切だと思う。母親の様子を見て、不安材料になるような否定的な言葉は、使わないほうが好ましい。

本児のいる前で、保育士と保護者が会話している様子をYが気にかけているようであれば、時には母親と時間をかけて、話し合うことが必要ではないか。

保育士の気づき

母親との会話が、これまで送迎時の短時間で行われ、本児が話をしているのを気にして母親の手を引っ張る姿や、母親もそんな本児の姿を気にかけながら話をすることで、落ち着いて話すことができなかったのではないかと反省した。気になることがある時は“いつでもゆったりと会話できる時間を設けます”と伝え、場を設けていくようにしたい。

また、保育士自身が保護者の不安をあおるような言葉を気づかないうちに発していたのかもしれないので、相手の気持ちを考え保護者が安心できるような言葉がけを心がけていくようにしたい。

会話記録を通して、「できる、できない」に揺れてしまいがちな保護者の気持ちを受けとめ、不安を取り除いていくようにすると共に、Yの心の育ちや葛藤、友達との関わりに目が向くように、主任保育士が担任保育士と繰り返しやりとりしていくことで共通理解を図り、保護者との信頼関係が深まるような助言をしていった。

保育士の思い

会話記録をきっかけに、保護者の気持ちを気にかけ、心の変化を探ったり、自分の対応について見直したりすることができる良い機会になった。Yの場合、子どもが不安を母親に伝え、それが母親の不安となり、また子どもへ伝わっていく様子が見られたが、保護者対応に目を向け、保護者ができるだけ安心できるような関わりを持ったことで、子どもの変化につながったように感じる。

会話記録を通して

○ 担任保育士と共に会話記録を振り返り、日々の対応を見直す中で、保護者の思いに寄り添い、保育や子どもの成長を通して保護者との信頼関係を築いていく大切さを共通の認識とすることができた。

○ 保育士と保護者が、信頼関係を深めていく過程が、子どもの心の変化にもつながり、子どもが、活き活きと自分を表す基盤となっていくように思われた。

○ このような会話記録についての事例も、園内研修の場で、お互いに検討する。一人一人が自分の保護者対応を見直す視点を持ち、高め合っていけるようにしたい。そのために、場を設定したり、お互いの思いが言い合える職場内の雰囲気作りや体制づくりも主任保育士としての大切な役割だと改めて認識できた。

② 園内研修を持ち、保護者対応におけるコミュニケーション能力の向上を図る。

○ 園内研修の中で、主任保育士から保護者対応で難しいと思われる時は何かを問いかける。

※ 子どもの姿を伝えようとしても、特に問題なく過ごしている子は、何を伝えてよいかを迷う。

※ 保護者の子育てに対する思いが多様で、思いをくみとれないときがある。

＜意見交換の場で＞

・今まで何事もないときは、挨拶をして見送るだけになっていた。もっとよく子どもを見ていくことや、保育士間で情報交換し、いろいろな姿を伝えられるようにした。

・子どもの頑張ったことや、良いところは伝えていたが、「思いを出している姿」を伝えることも大切であることを気づかされた。

・保護者の子どもへの思いを一方的に決めつけていたように思う。もっと、保護者の思いに寄り添っていくように努めたい。保護者に「話を聞いてもらいたい」と思ってもらえるよう保護者と信頼関係が築ける努力をしたい。

⇩

＜主任保育士のアドバイス＞

保護者が何を心配しているのか何を望んでいるのか、そこを丁寧に読み取っていくことが大切である。良いところや頑張ったことばかりではなく、子どもが思いを出せていることを伝える姿勢も必要ではないか。
今後も、保育士と保護者との具体的な会話の記録をとり続け、保護者対応について振り返りを持ちつつ、子どもの変化を見ていくことが大切である。
また、これから園内研修を積み重ねていくことで、園全体で子ども達の共通理解を図り、保護者との対応も多面的に捉えていくことが必要である。
子ども・保護者・保育士三者が信頼しあえる関係を築くよう保育園全体で取り組んでいきたい。

≪家庭支援の考察≫

保護者との会話記録をとったり複数の保育士との園内研修を持ったりすることで、自分の保育を振り返り、より深く分析して次に生かしていくというプロセスの重要性がさらにはっきりした。このプロセスを繰り返していくことで、保護者に対するコミュニケーション能力の向上が図られていくと思われる。

Ⅴ まとめと今後の課題

1 まとめ

「友達あるいは保育士に自分の思いをなかなか表せずに毎日を過ごしてしまう子」に、どのような働きかけが有効となり、その子が思いを表出できるようになるかという事例検討の結果から、次のことが明らかになった。

○ 日々の保育の中で、記録をとる習慣をつけることの大切さ。

○ 記録をとることで、子どもの思いに対しての気づきへのきっかけとなる。

○ 園内研修を通して、自分の振り返りをして自己評価につながる。

○ 日々の保育の中で、常にPDCAを行うこと。

以上のことから、「友達や保育士に自分の思いをなかなか出せずに毎日を過ごしてしまう子」に対して、保育士はどのような姿勢で対応すべきか、という振り返り項目を主任保育士としての立場から「保育士の姿勢」「連携体制」「自己評価」など、7項目にまとめていった。その際、保育士に分かりやすいように文章を簡潔にまとめたり項目別に分けたりして図式化し、イラストを入れることで視覚的に見やすく、かつ保育士が「やってみよう」と思えるような柔らかいイメージの題目**「子どもが自分の思いを表しやすい保育」となっているか振り返ってみよう**の図式(資料参照)を作成した。

2 今後の課題

この研究から「友達あるいは保育士に自分の思いをなかなか表わせずに毎日を過ごしてしまう子」に限らず、全ての子どもにとっても保育士の関わりが思いの表出に深く関わっていることに改めて気づかされた。また保育士自身も事例をとったことで、子どもは保育士に思いを受け止めて欲しいのではないかということに気づき、保育を見直すきっかけともなったように思う。

研究の結果を考察し、主任保育士として保育士の気づきへの手助けとなるように「保育士の振り返り表」を作成した。今後はこの表を活用しながら、保育士の意識の変容がより深まる機会を意識してつくっていくようにする。また表については豊橋市内の保育園57か園全体での共通理解の資料となるように各園の保育士に周知する。そして、実際に活用しながら見えてきた疑問点や修正点の検討を重ねていき、保育に生かしていくとともに、保育士の自己評価から保育の資質向上を目指すことが必要であると思われる。このような、保育士の努力が、子どもたちの変容へとつながり、子どもたちが自分の思いを表しながら日々過ごせるようにすることが、私たちの今後の大きな課題になっていくのではないか。そして、このような保育の資質向上に主任保育士が日々務めていくことで、豊橋市全体の保育を深めていくことにつなげていきたい。

（資料）

「子どもが自分の思いを表しやすい保育」となっているか振り返ってみよう

保育士の姿勢

○待つ姿勢
せかすことなく、ゆったりとした気持ちで子どもの思いを聞き、待つようにしている。

○寄り添う姿勢
スキンシップを図り、笑顔で寄り添い、見守られているという安心感をもたせるようにしている。

○ありのままを受けとめる姿勢
「がんばれ」とあまりプレッシャーをかけすぎず、「失敗してもいいよ」という気持ちを伝え、ありのままの子どもを受けとめるようにしている。

言葉がけ

○「早くしなさい（○○しなさい）」「○○はだめ」などの指示、命令、禁止する言葉をなるべく使わないようにしている。

○「YES」「NO」だけで返事ができてしまう問いかけではなく、自分の気持ちや思いを表すことができるような言葉がけをしている。

保育士の気づき

○子どもが何かを伝えようとしている思いや行動、しぐさを見逃さずに気づき、気持ちや思いを出しやすいようにしている。

発達過程の理解

○子どもの発達は連続性の中で、進んだり後戻りしたりすることを考え、柔軟性のある関わりをしている。

○一人一人の子どもの発達過程を理解し、その子らしさを大切にしている。

環境づくり

○居場所づくり
子どもの得意なことや一生懸命取り組む姿を皆の中で認めたり褒めたりして、自信や満足感を与え、子どもが存在感を持てるようにしている。

○会話の弾む環境づくり
子ども同士や保育士との会話が弾むような関わり方を心がけ、環境づくりをしている。

連携体制

○職員間の連携
担任だけでなく、全職員で子どものありのままの姿や思いを受けとめ、安心できる居場所を作るようにしている。

○保護者との連携
子どもの良いところや少しでも伸びている姿を見逃さず、保護者とお互いに伝え合い、子どもの成長している姿をともに喜び合うようにしている。

自己評価

○日々の保育を自己評価し、反省したことを改善して、保育の方法や環境を見直すようにしている。